「G.W.F. ヘーゲルの遺稿」序説

エヴァ・ティーセ
尼　寺　義　弘（訳）

キーワード
遺稿，ベルリン国立図書館，原稿，草稿，イマーヌエル・ヘーゲル，カール・ヘーゲル

ここに邦訳するヘーゲルの遺稿に関する論説は，ベルリン国立図書館・手稿部門において長年にわたりヘーゲルの遺稿のカタログに取り組んでこられたEva Ziesche女史（Bibliotheksamtsrätin）の“ヘーゲル・カタログ”[1]への序説である。翻訳にあたり訳者の問いに対して同氏の詳細な説明と文献の紹介を頂いた。末尾の注はそれに基づいている。ここに深甚なる謝意を表するものである。

ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルに関して，あとに残された文書類は100年以上も前からベルリン国立図書館――当時はプロイセン国家の王立図書館――に所蔵されています。ルートヴィヒ・シュテルン[2]はこの遺稿についてすでにそれの取得の年である1889年に短い手書きの遺稿目録を作り上げています。その目録は1904年に今日の作品に仕上げられ，そして更なる追加によって引き続く歳月のなかで補充されてきています。この間にヘーゲルのあらゆるテクストの大半は印刷されているのですが，その際にそのつど――異なった仕方で――基礎にある手稿と関連づけられてきました，したがって統一的な基準にもとづく全体の遺稿の目録を作りあげることが必要不可欠のことでした。ここに呈示するこのカタログ[3]はヘーゲルの遺稿と個別のテクストの成立の歴史および継受の歴史を考慮に入れて，ベルリンの手稿部門が所蔵するヘーゲルの遺稿およびヘーゲルのそのほかの作品を詳細に描写しています。その際これらのテクストの担い手として用いられた紙の性質がはじめて体系的に吟味され，評価されました。

遺稿を受け継いだ年である1889年以前には“ヘーゲル”は王立図書館ではわずかな手書きの作品によって代表されていただけです。最初の取得は1833年10月であり，それはヘーゲルの1821年の『宗教の哲学』です[4]。フィリップ・コンラート・マルハイネケ[5]はこの手稿を1832年の「故人の友の会[6]」による著作集第11巻の『宗教哲学講義』の出版のために利用したのちに，彼はこの手稿を図書館に寄贈しました。カール・ルートヴィヒ・グレーゴール・フォン・マーズバッハ[7]（1847年死亡）は，彼のコレクションのなかにヘーゲルの手になる「短信」をもっていました。そのコレクションは遺稿とともに1850年以来の別々の時期にこの図書館に入手されました[8]。二人の熱心な自筆原稿の収集家，一人はプロイセンの陸軍少尉ヨーゼフ・マリーア・フォン・ラードヴィッ[9]（1854年死亡）ともう一人はカール・アウグスト・ファルンハーゲン・フォン・エンゼ[10]（1858年死亡）によって，個別の異なる自筆原稿が1864年と1880年にこの図書館にもたらされました[11]。マリー・ヘーゲル[12]が1844年にグスタフ・パルタイ[13]に記念として送ったところの1819年の家計のカレンダーが[14]，フリードリヒ・ニロライ[15]の遺稿とともにそれに加わりました[16]。王立図書館宛のヘーゲルの1824年の手紙は記録文書類[17]のなかから「館内の取得[18]」として自筆原稿のコレクションへと

無断転載禁止

受け継がれました[19]。

ヘーゲルの学問上の遺稿は彼の死後は家族が所有していました。マリー・ヘーゲルと――1855年の彼女の死後は――二人の息子，カール[20]とイマーヌエル[21]はヘーゲルの残された手稿に対する彼らの大きな責務を意識していました。子供たちは「故人の友の会」による『著作集』出版のための編集者とヘーゲルの伝記を書くためのカール・ローゼンクランツ[22]に文書類を自由に利用させました。ローゼンクランツは1839年と1840年に資料をケーニヒスベルクへ送ってもらったほどでした。カール・ヘーゲルは1877年よりこのかた，この会による著作集出版の締めくくりとして，1887年に公刊された『ヘーゲルのおよびヘーゲル宛の手紙』を仕上げました[23]。こうして父の遺稿の学問上の活用は息子たちが注視するなかで完了しました。遺稿に関して将来生ずるにちがいない問題は，相続人がそのことで悩まされないために，1855年このかた熟慮されてきて，イマーヌエルの提案，すなわち「著作と講義の自筆原稿はベルリン図書館にゆだねること，その他のものの多くは処分すること，そして子孫の記念としてふさわしい個々の作品のみが保管されること[24]」となりました。彼は兄カールへ1889年4月14日付の手紙で知らせています，「当地の王立図書館に精選された父の著作をあなたの目録とともに木箱に入れてていねいに発送しました，それに対して館長のDr. ヴィルマンスより好意あふれる感謝状を，あなた宛のそれもあわせて受け取りました。その他の遺稿は今後の乱用を未然に防ぐために当地の製紙工場へ配送されました[25]」。王立図書館の1889年の取得の通信文書[26]は失われています。1889年の到着したおよび発送された郵便物の書簡日誌[27]は保存されています，それにはつぎのように書き記されています，「2月19日，エアランゲンのヘーゲル教授より，故ヘーゲル教授の遺稿の一部が寄贈される。2月23日，エアランゲンのヘーゲル教授宛に礼状を送付する。――3月27日，ヘーゲル会長は，彼の父，哲学者ヘーゲルの原稿をここに送る，3月29日，礼状を送付する」。王立図書館の手稿の取得日誌[28]には二つの納入物が互いに連続した受け入れ番号で登録されています。すなわちacc.ms.[29] 1889. 224-242という番号がエアランゲンのカールの送付物に対して，そして同243-259という番号がベルリンのイマーヌエルの送付物に対して登録されています。カール・ヘーゲルは保管されているすべてのヘーゲル宛の手紙をヘーゲルの個別の手紙の草稿とともに送付しました。それはカールが出版のために文通相手のもつ意義にしたがって，そしてその時期にしたがって整理していたものです。そしてそれは個別の小包み「a」から同「p」まで数えられています[30]。とりわけ彼はエアランゲンに――個人的な関心から――国権についての草稿と1801年の「惑星の軌道について」の印刷された大学教授資格論文をもっていました，彼はそれらに大文字で「A」から「D」まで記号をつけていました[31]。カールがベルリンを訪問したときに，1から17まで数えられる数字を記入し，そして短い内容の記述のある紙片を付した原稿がイマーヌエルより寄贈されました。とりわけそれにはヘーゲルの手書きの補遺のある『法の哲学』と『精神の哲学』の間紙を入れた二つの自家用本が属しています[32]。そのほかのヘーゲルの原稿は1891年に死亡したイマーヌエルの遺産のなかからカール・ヘーゲルによって1895年に120葉からなる『神学[33]』が遺稿として図書館へ寄贈されました。ヴィルヘルム・ディルタイ[34]がきっかけを作ったところのベルリン科学アカデミーの懸賞論文の募集を機会として，カール・ヘーゲルは1900年に彼の父の追加の，広範囲な原稿，すなわち117葉からなる『自然および精神の哲学[35]』を譲渡しています。イマーヌエルの家族より図書館は1906年に『キリスト教の批判』および『国民宗教[36]』のそれぞれ欠落していた部分の2ボーゲンを入手しています。

王立図書館，すなわち1919年以降はプロイセン国立図書館は遺稿の取得ののち第二次世界大戦まで規則的に追加のヘーゲルの文献およびヘーゲルに関するそれを収集してきました。それには主として自筆原稿のオークションで売りに出されたヘーゲルの手紙類や，さらには時の

無断転載禁止

経過とともに遺稿とは縁遠くなっていたところの，あるいは，思い出の品として贈られていたところの，手稿一断章があります[37]。そのなかには1904年に古書籍商レーオ・リープマンスゾーンによって買い取られたような非常に重要な補遺があります。それらはフリードリヒ・フェルスター[38]の遺稿に由来しています。彼は友の会の出版による著作集第16巻および第17巻――「種々雑多な著作」よりなる――の発行者としてさまざまな著作を手許に留めていたのです[39]。1913年にリープマンスゾーンによって買い取られた『ドイツ観念論の最古の大系プログラム[40]』もフェルスターの遺稿に由来しています。最も広範な補遺がイマーヌエル・ヘーゲルの孫娘フリーダによって1935年に図書館へもたらされました，彼女は陸軍少尉ハンス・ハインリッヒ・ズィクスト・アルニムと結婚していました。それは青年時代の作品と数多くの抜き書き，ヘーゲルの手紙の草稿と手紙の清書，クリスティアーネ・ヘーゲル[41]およびニュルンベルクの親族との往復書簡，マリー・ヘーゲル宛のアルテンシュタイン大臣[42]およびカール・ローゼンクランツの手紙，記録文書と旅行のパスポート[43]でした。ヨハネス・ホフマイスターは「ヘーゲルの発展の記録[44]」に決着をつけたのちに，他人の所持する[45]ヘーゲルの自筆原稿のコピーと写真を最終的に1936年と1937年に寄贈しました。

1941年に始まる第二次大戦中は，戦争によってひきおこされたプロイセン国立図書館の蔵書類の移転によって，そして1945年以降は政治的な展開によって――図書館全体と同じように――ヘーゲルの蔵書類も分離されていました。終戦のときにヴュルテンベルクのボイローン修道院にしまわれていた遺稿は，1967年までテュービンゲン大学図書館のかつてのプロイセン国立図書館の倉庫に保管されていました。そしてそれから遺稿はベルリンのプロイセン文化所有財団[46]に属する国立図書館へ帰ってきました。シュレージィエンに疎開していた自筆原稿のコレクションは今日クラカウのヤギィエローンスカ図書館に保管されています。プロイセン文化所有財団の国立図書館は――その伝統のうちにある――財政上の可能性に応じて追加のヘーゲルの文献を取得してきました[47]。さらに加えて1975年にはヘーゲルのニュルンベルク時代の口述ノートがモーリツ・ハウプト[48]の遺稿のなかに再び見つけ出されたときに，「館内の取得」がありました。そのノートは1889年に遺稿とともに取得されていたのですが，しかしこの世紀の変わり目のすぐあとで贋物の遺稿として処理され，そしてその後行方不明となっていたものです[49]。同様に1994年にはこれまで目録には記載されていなかったヴォルダァマル・フォン・ディトマル[50]の遺稿のなかに1816年のハイデルベルクの講義の告知が姿を現わしたのです[51]。ヘーゲルの講義の筆記録もまた，そのあらゆる時期にわたって，1831年のヘーゲルの死後ずっとこの図書館に収集されてきています[52]。

ヘーゲルはギムナジウム生以来このかた自分の草稿を保管してきました。それで1785年から1787年[53]にかけてのギムナジウム生時代の日記帳が今日も伝えられています。遺稿のなかにはテュービンゲンからベルリンに至るまでの，彼の経歴の連続するすべて段階からなるテクストが保存されています。思いもかけない彼の死によってマリー・ヘーゲルはこれらの「財宝」の責任ある監督者となりました。彼女は『著作集』出版の編集者にもっとも心の広い仕方で草稿を利用できるように配慮し，そしてヘーゲルを回想する作品への相当の願望をも満たしたのです[54]。文書類の一覧表あるいは整理はマリー・ヘーゲルによって企てられてはいません。ローゼンクランツはヘーゲルの伝記を書くために1839年および1840年にケーニヒスベルクの彼宛に送られた遺稿の整理を初めて試みています。彼の手になる内容記載の厚紙の青い封筒が今日なお遺稿のなかに現存しています[55]。精選された原稿を王立図書館へ寄贈するという1885年の息子たちの決意が初めてカール・ヘーゲルをして現存する原稿を分類し，そしてそれに内容を略記した送り状を添付するというきっかけとなりました[56]。これらの小包みは1889年に図書館へ送られ，受け入れ番号が付されて，厚紙の大きなケース4個に納められて

無断転載禁止

います。1886 年には王立図書館の管理の必要な再組織によって手稿のための独自な部門が創設されました。遺稿および自筆原稿はオリエント学者ルートヴィヒ・シュテルンが管轄しました。1889 年に彼は 1661 年の図書館創設以来の最初の包括的な遺稿の目録[57]を執筆しています。彼は譲渡表の文字あるいは数字の指示のあるローゼンクランツの上書きおよびカール・ヘーゲルのそれを受け継ぐことによって，彼はここにヘーゲルの遺稿のケース 4 個の内容をも記載しています。第二の，今日なお妥当している目録，それはシュテルンがもっとも多種多様なコレクションを筆者のアルファベット順に排列しているところの，自筆原稿のコレクションの再編成と関連して 1899 年に成立しています。その際に現存する遺稿のなかからも手紙類が取り出されています，そしてそれは遺稿の由来が記載されて発信者のアルファベット順に分類されています[58]。

遺稿を利用することによる最初の成果は 1893 年の国家学者ゲオルク・モラート[59]編集の『ドイツ憲法論批判』と『人倫の体系』という二つの作品の出版です。彼は当該の原稿を吟味するためにそれをカッセルのムールハルド図書館へ送ってもらっています。1890 年から 1921 年までの遺稿および自筆原稿のベルリンの利用者名簿は 1899 年までヘーゲルの遺稿の利用がなかったことを示しています。1899 年 11 月にはじめてヴィルヘルム・ディルタイが資料全体を閲覧しています。1900 年に彼はすでにふれたアカデミーの懸賞論文の募集に,「ヘーゲルの大系の発展史はベルリンの王立図書館に所蔵される原稿の利用によって表現されるべきである……[60]」と提起しています。1900 年 10 月より 1901 年 12 月までフーゴ・ファルケンハイム[61]は遺稿の諸部分を連続してミュンヘンの大学図書館へ借り出してもらっています。それに続く時期において原稿に徹底して取り組むことは，図書館を強いて資料の再編成と安全の確保へと努めさせることとなります。原稿は諸巻のなかへしっかり編み込まれていて，それは第 1 巻より第 14 巻まで数えられています。手紙類は自筆原稿のコレクションへとまとめられています。印刷物は Libri impressi cum notis manuscriptis（手書きの注解のある印刷物）という分類番号シリーズへと配置されています。1904 年に再編成は終了し，そしてそれに応じて遺稿の目録は変更しました。パウル・ロック[62]は 1906 年に『イエスの生涯』を出版し，それの典拠として第 7，8 および 11 巻を挙げています[63]。1907 年に『青年時代の神学的な著作』を出版しているヘルマン・ノール[64]は，図書館の管理指導のもと巻 7，8 および 11 が解体され，そしてそれらが草稿を意味のある関連に導くところの，彼によって指示された順序でそれらが新たに結び合わされるということに到達しています[65]。1935 年という後年の取得は遺稿にケース 15 として番号づけがなされています，1975 年の取得であるニュルンベルク時代の口述ノートはそれにケース 16 として番号づけがなされています[66]。新たに取得されたヘーゲルの個別の自筆原稿は自筆原稿コレクションに入れられています。戦後に取得されたものは同様に個別の自筆原稿として保管されています。講義の筆記録は手稿本としてゲルマン原稿（Manuscripta germanica）のシリーズに，つまりプロイセン文化所有の国立図書館の,「手稿」――シリーズ（ Hdschr.）に納められています。

このカタログは二つの部分から成り立っています，第一の部分はヘーゲルの遺稿――今日のシリーズではケース 1 から同 16 まで，および国立図書館がそれを所有しているか，あるいは，所有していたところのヘーゲルの追加の文献――付録 1 から同 44 までの描写をしています。第二の部分はヘーゲルの原稿の分析的な研究およびそれが製紙工場，製紙工および透かしの意匠の索引によって補足されているところの挿絵のある透かしを要約しているカタログを含んでいます。

第一の部分の原稿の記載の仕方は形式的な描写と内容の表示に分けられます。前者については，寸法，装丁，紙質，原稿の状態，筆記用具，他人の記入，日付および生成と由来の指摘の表示を含んでいます。ヘーゲルの原稿の書体の変

無断転載禁止

更の案内は，それが直接に先行するテクストの変化としばしば結びついているところの，下書きの際の新たな始まりを示しています。透かしについてはそれのカタログが参照できます。目次の要旨にはページづけがされています。オリジナルなテクストはイタリック体で印刷されています，ヘーゲルの下線の引き方は特徴的です。文献の案内にはオリジナルな原稿がそれの基礎となっているところの編集の仕方が示されています。ヘーゲルに由来していないところのあらゆる資料については描写は簡略化されています。人物の索引および事項の索引はヘーゲルのテキストの最初の頭文字の索引および彼の文献目録によって補足されています。

私はそれが職務外でのみ可能であったところの，ヘーゲルの文書類にすでにもう多年にわたって継続的に従事してきた過程で，つぎの方々に多種多様に感謝しなければなりません。何よりもまずそれはルドルフ・ティーセ，Prof. Dr. ディーター・ヘンリッヒそして Prof. Dr. フリートヘルム・ニコリーンの絶えざる知的に興味のある援助と支援に対してです。私は助言と照会に対してボッフムのヘーゲル・アルヒーフの Dr. ヘルムート・シュナイダーと Prof. Dr. オトー・ペゲラーに，コブレンツの州立中央アルヒーフの Dr. ブロマーに，クラカウのヤギィエローンスカ図書館のエリーザベト・ブルダに，（米国）マサテューセッツ州ケンブリッジのホートン図書館の手稿部門長ロドニー･G･デニスに，ベルリンのグスタフ・ファルケに，ベルリンの Prof. Dr. ヴァルター・イェシュケに，キールのブリギッテ・フォン・コシィツキーに，ボッフムの Dr. クルト・マイストに，ベルリンのフンボルト大学アルヒーフの Dr. W. ツュルツェに，テュービンゲンの大学図書館の Dr. フリードリヒ・ゼックに感謝致します。紙の性質の歴史的な考察の支援に対する感謝は透かしのカタログのなかに記されています。とりわけ私はベルリンの手稿部門の長である Dr. ティーロ・ブランディスに，ヘーゲルの原稿を図書館の外で，資料の調査と検査のための国の機関で紙を歴史的に分析することを許可してくれたことに対して感謝しなければなりません。透かしの電子放射線透過検査法の創出の可能性は，これらの新しい手稿を透かしの助けによって日付を入れ，そしてこれらの成果をこのカタログに取り入れるための前提でした。私は印刷用原稿の作成の際の助言と助力に対してハラソヴィツ社のミヒャエル・ラングフェルト氏に，私の同僚 Dr. ベルント・ミヒャエルに，そして電子情報処理部門のヤン - ゲルト・ハンス氏とコンラート・ハインボックル氏に感謝しなければなりません。

ベルリン，1994 年 10 月

エヴァ・ティーセ

注

1）Eva Ziesche : Der handschriftliche Nachlass Georg Wilhelm Friedrich Hegels und die Hegel-Bestände der Staatsbibliothek zu Berlin Preussischer Kulturbesitz. T.l. Wiesbaden : Harrassowitz 1995.（Kataloge der Handschriftenabteilung. Reihe 2. Bd 4.）
2）Ludwig Stern（1846-1911），オリエント学者，図書館司書，1905-1911 ベルリン王立図書館・手稿部門長。
3）E. Ziesche aa0.
4）［原注 1］Anhang 4 : Ms. germ. qu. 397.
5）Philipp Konrad Marheineke（1780-1846），神学者。
6）Verrein der Freunde des Verewigten : 1831 年 11 月 14 日のヘーゲルの死後ベルリンのもっとも親密な友と弟子たちが彼の作品の完全な版を刊行するために「故人の友の会」を結成しました。
7）Karl Ludwig Gregor von Meusebach（1791-1847），文献学者。
8）［原注 2］Anhang 40, Nr 16.
9）Joseph Maria von Radowitz（1797-1854），プロイセンの将軍にして大臣，自筆原稿の収集家。
10）Karl August Varnhagen von Ense（1785-1858），外交官，著作家，自筆原稿の収集家。
11）［原注 3］Anhang 40, Nr 13-15 und Nr 1-10.
12）Marie Hegel（1791-1855），ヘーゲルの妻。
13）Gustav Parthey（1798-1872），書籍商にして出版者。
14）Haushaltskalender von 1819，ヘーゲルが家計に属するあらゆる費用を書き込んだ帳面。
15）Christian Friedrich Nicolai（1733-1811），著述家にして出版業者。

無断転載禁止

16）［原注 4］Anhang 40, Nr 11; Quittung für Parthey Nr 17.
17）Akten：記録文書の束，そのなかの一つに図書館の公的な往復書簡があり，そこに王立図書館宛のヘーゲルの手紙がありました。
18）“innere Erwerbung”：図書館内の取得。
19）［原注 5］Anhang 40, Nr 12.
20）Friedrich Wilhelm Karl Hegel（1813-1901），1856 年以来エアランゲン大学歴史学教授。
21）Immanuel Thomas Christian Hegel（1814-1891），ブランデンブルク州宗務局長官。
22）Johann Karl Friedrich Rosenkranz（1805-1879），ケーニヒスベルク大学哲学教授。『ヘーゲル哲学入門』1840 年，ベルリン（ヘーゲル全集，第 18 巻）。『ヘーゲルの生涯』1844 年，ベルリン（ヘーゲル全集，補巻）出版。
23）［原注 6］Hegel, Werke. Bd 19. 1887. -vgl. W. F. Becker, Hegels hinterlassene Schriften im Briefwechsel seines Sohnes Immanuel, in : Zeitschrift für philosophische Forschung. 35, 1981, S. 592-614, bes. S. 608f.
24）［原注 7］Brief Immanuel Hegel an Karl Hegel, Berlin 6.7. 1885, s. W.F.Becker aa0. S. 610.
25）［原注 8］W. F. Becker aa0. S. 613.
26）Erwerbungskorrespondenz：取得の通信文書（手紙）。
27）Briefjournal：書簡日誌。図書館が受け取り，そして送付したすべての郵便物について，1. 受け取りの日付，2. 送り主，3. 短い内容の記載，4. 係りの氏名と返事の日付，が書き記されています。
28）Erwerbungsjournal：取得日誌。プロイセン王立図書館の異なる部門（たとえば，音楽部門，手稿部門，利用部門等々）はそれぞれ取得の固有の日誌をもたねばなりませんでした。それには，1. 日付，2. 売り主，3. 簡単な特徴づけ，3. 値段，4. 取得されたものが正しく書庫に入れられる分類番号がそれぞれの異なる欄に書き記されていなければならなかったのです。
29）acc.ms. : accessio manuscriptorium
30）［原注 9］Anhang 40, Nr 18-37, und Nachlaß 14, Anhang.
31）［原注 10］Nachl. 1 und 13, Libri impressi cum notis manuscriptis oct. 300（Anhang 3), vgl. die Vorbemerkungen zu den Beschreibungen.
32）［原注 11］Nachl. 2-9, 16 ; Libri cum notis manuscriptis oct. 126 und 127（Anhang 1 und 2).
33）［原注 12］Nachl. 11.
34）Wilhelm Dilthey（1833-1911），1900 年，ベルリン科学アカデミー会長。
35）［原注 13］Nachl. 12.
36）［原注 14］Eingefügt in Nachl. 7, B1 20ff., 60ff.
37）［原注 15］vgl. Anhang 40, Nr 38ff.
38）Friedrich Förster（1791-1868），歴史家。
39）［原注 16］Anhang 40, Nr 47-72.
40）［原注 17］vgl. Nachl. 14, Fasz.3 und Anhang 40, Nr 81.- D.Henrich, Aufklärung der Herkunft des Manuskripts “Das älteste Systemprogramm des deutschen Idealismus”, in : Zeitschrift für philosophische Forschung, 30, 1976, S. 510-528.
41）Christiane Hegel（1773-1832），ヘーゲルの妹。
42）Karl Sigmund Franz Altenstein（1770-1840），ドイツ（プロイセン）の政治家。最初の文相（1817-1840）。
43）［原注 18］Nachl. 15, Fasz. Ⅰ - Ⅵ.
44）Dokumente zu Hegels Entwicklung. Hrsg. von Johannes Hoffmeister. Stuttgart 1936.
45）［原注 19］Nachl. 15, Fasz. Ⅶ.
46）Stiftung Preußischer Kulturbesitz：1957 年 7 月 25 日の連邦法に基づき西ベルリンに創設された財団。この財団は 1962 年以来，かつてのプロイセン国家の文化コレクションを管理運営しています。
47）［原注 20］Anhang 8-14.
48）Moriz Haupt（1818-1874），古典文献学者にしてゲルマニスト。
49）［原注 21］Nachl. 16 - E. Ziesche, Unbekannte Manuskripte aus der Jenaer und Nürnberger Zeit im Berliner Hegel- Nachlaß, in : Zeitschrift für philosophische Forschung, 29, 1975, S. 430-444.
50）Woldemar von Ditmar（1794-1828），リヴォニア（バルト海沿岸のエストニア，ラトヴィアにまたがる地方）の法学者。
51）［原注 22］Anhang 44.
52）［原注 23］Anhang 18-39. 41. 42.
53）［原注 24］F. Nicolin, Hegel 1770-1831. Ausstellungskatalog. Stuttgart 1970, Nr 70.
54）［原注 25］vgl. Anhang 40. Nr 11. Nr 91，1822 年 7 月のドゥボック宛の手紙の草稿は彼女（マリー・ヘーゲル）によってヴィルヘルム・ドゥロゥウに贈られました。ヴィルヘルム・ドゥロゥウ『編集者のコレクションのなかの著名な男性および女性の手稿のファクシミリ』，ベルリン，1836 年，Nr. 13. を参照しなさい。何人かの編集者（フリードリヒ・フェルスター，カール・ローゼンクラツ）も個別の原稿をもっていて，内容が本物であるという説明のある一枚の紙片をプレゼントしました。ヘーゲルの自筆原稿にエドゥアルト・ガンス（マルバッハ DLA, Inv.7391），ホトー（Anhang 40, Nr. 109），ローゼンクランツ（Anhang 5, B11; Anhang 10）に

無断転載禁止

よるかかる贈与の覚え書きがあります。カール・ヘーゲルも父の紙片を贈与しました（Anhang 5, B12, 3; Anhang 40, Nr. 106）。アルノルト・ゲンテはローゼンクランツの遺稿のなかの一枚の紙片を 1881 年にプレゼントしました（Anhang 40, Nr. 113）。

55）［原注 26］Vorbemerkungen zu Nachl. 1. 5. 8-12. 15 Ⅵ, 2. 16, Fasz. 1.

56）［原注 27］Vorbemerkungen zu Nachl. 13, B1 62a; Anhang 3; Nachl. 16, Fasz. 1; Nachl. 5. 6. 2, B1 ※1. 11. 49; Nachl. 3, B1 ※1, ※19; Nachl. 4, B1 ※1; Nachl. 11, B1 161a.

57）［原注 28］コレクション：『学者の遺稿』。〔ルートヴィヒ・シュテルンによって〕1889 年 8 月に作り上げられる。シュテルンについては，エミール・ヤーコプス，「ルートヴィヒ・シュテルン」, in : Zentralblatt für Bibliothekswesen 29. 1912, S.26-31. を参照しなさい。

58）［原注 29］数巻にのぼる自筆原稿のカタログと遺稿のカタログがウンター・デン・リンデンのベルリン国立図書館に保存されています。遺稿のなかの手紙を出版する仕事はシュテルンの死（1911 年）後は中止されています。ヘーゲルの自筆原稿に関しては Anhang 40, Nr 18-37 を参照しなさい。ヘーゲル宛の手紙にはさまざまな差出人がいます，Nachl. 14, Anhang. を参照しなさい。

59）Georg Mollat（1863-1931 頃），ジャーナリスト。

60）［原注 30］Hegel, Werke. Theorie-Werkausgabe. Bd1, Frankfurt a. M. 1971, S.623. ―― 1899 年 12 月 12 日に原稿を閲覧したマルティン・ブーバァーは利用者としてそれ以降は登場していません。

61）Hugo Falkenheim（1866- 没年不詳），国家学者。

62）Paul Roques（1879- 没年不詳）。

63）［原注 31］Hegel, Das Leben Jesu. Jena 1906.

64）Herman Nohl（1879-1960），ヘーゲル研究者。

65）［原注 32］s.Vorbemerkung zu Nachl. 7.

66）［原注 33］ライン－ヴェストファーレン科学アカデミーによるヘーゲル『全集』の出版の準備作業の関連で 1958 年に原稿は再び解体され，そして 1962 年に遺稿の巻 1 と巻 8 のみが新たに出版されています。

（2004 年 10 月 19 日受付）

無断転載禁止